里地里山保全再生モデル事業（神奈川県秦野地域）
試行事業に向けた意見交換会（北、西地区）議事概要

日　時　平成17年6月20日(月)19:00～21:00
場　所　農協北支所　会議室

参週者

里山保全団体
　アイウエオサークル
　秦野みどりの少年団
　かながわ山里会（欠)
　ソフトボール部ドリンカーズ
　宿矢名諏訪会
　丹沢ドン会（欠)
　秦野スカウト会　(欠)
　北小学校
　中ロータリークラブ(欠)
生産森林組合
　菩提生産森林組合
　羽根生産森林組合
　戸川三屋生産森林組合

共有林組合
　堀山下堀川共有林組合(欠)
　大倉梶ヶ谷戸共有林組合(欠)
　宮久保共有林組合
　沼代共有林組合
生産組合長代表
　北
　西
森林組合
　北
　西(欠)
農業委員
　北
　西
北地区みんなで住みよいふるさとづくり運動推進委員会
農協北支所

地域経済の活性化について
・山を持っている地権者の立場から。今の提案は私の考えとは大分かけ離れている。前回の会議で印象に残っているのは、「現金収入が得られなくなったから山を手入れできなくなった」ということ。登録、研修というより前に地域の経済の活性化がなぜ論じられていないのか、山に入って現金収入が入らないことがなぜ論じられないのか、非常に寂しい。 間伐材で園芸・土木資材を作って売る、キャンプ場、クラインガルテン、キノコ栽培などをするというのがなぜ入っていないのか。啓発、情報発信、体験ばかりで経済活性化に関することが全く入っていない。 これでは都市住民の日常の心身の疲れを癒すか、自然科学の研究の場にしかならない。地元にいかに金が落ちるかをテーマにしてほしい。それに重きを置き、その上でボランティアを含めることを考えていくべきだ。 【事務局】今説明したものは、市全体として取り組む基盤的なところに関するもの。今日のテーマは、全体の試行事業についてと、地区ごとの取組み計画についてだが、特に後者について具体的に皆さんの意見を聞きたい。 都市から人が来ないと地区の経済には繋がらない。東地区では都市部住民の体験を経済に繋げていくということが検討されている。上地区では地域全体の活性化のために、どのように地域をビオトープ化していくかがテーマとなっている。人がくる仕組を作らないと、各地区ごとの計画とかみあわない。そのため市全体の試行事業の中でその仕組みを提案した。これを受けて、では地区側では人が呼べるだけの素材をどう作るか、という話をしたい。何であれば皆で協力して取り組めるか、そのあたりの意見を伺いたい。
・山持ちの人達は、年金で生活が保証されている人なら持ち山の手入れができないこともないが、現実的には、少しは小遣いになるような仕組みでないと大方の山の手入れは継続できない。ボランティアも教える方も奉仕活動では結局続かない。今、菩提地区では部落あげて頑張っているが、対価がないと若手が参加しないし困っている。

鳥獣・ヒル問題と里山整備について

- この地区にはゴルフ場が４つある。いい雑木林のところはゴルフ場になっている。その中で、県下でも有数のお茶畑に鹿とヒルが入って栽培ができないような状況になっている。薬剤は地下水に影響するのでまけない。落ち葉を、せめて手間賃代が出るくらいでひきとってもらえれば落ち葉かきも進むのだが、落ち葉にヒルがいて牛にヒルがついてしまうので引き取ってもらえない。そういった環境を認識してどうクリアしていけるか考えてほしい。
  山に草がないので鹿が降りてきて困る。菩提では庭にも鹿が来てヒルを置いていく。現実問題として、蓑毛から羽根、菩提まで来ている。それを何とか国の力で解決してもらいたい。
  薬品の研究はされているが、地下水の関係で使えない。鳥獣ヒル対策をしてもらわないと、ボランティアにきてもらっても、少面積なら遊びの延長でできるが、全体のことを考えるとそれではいけない。
- ヒルの対策については、5月の全体会でお願いしたし、昨年10月にも、まず最初にヒル対策を早急に国をあげてして欲しいとお願いした。山の保全は夏下草刈が必要で、今がその作業次期。しかし今が最もヒルの問題が大きい。一部の山はヒルがうじゃうじゃしている。体中真っ赤になって作業は出来ない。6月末に作業するので事務局の方にきて確認してほしい。

  林の整備に関しては渋沢地区は進んでいるらしいが、あちらは鳥獣・ヒルの被害が殆どない。北・西は我々でさえ山の中に入れない状況。そこを現実的に改善してもらわないと、経済活性化など以前に問題である。それをモデル事業の先決としてほしい。

  > 【事務局】ヒル対策については環境省でも全国に学者がいないか調べた。しかし、現実的に確実な対策といえるものは明らかになっていない。しかしヒル対策の学術的な研究は里地里山保全再生の事業にはなじまない。
  > そこで、里地里山保全の実作業をやってみて、その中でヒルに対しどういう効果があるかを実証するのはどうか。例えば、12月に落ち葉を掻き、掻いた場所、掻いて火で炙る場所、何もしない場所など、環境傾斜をつけて効果を検証する。そのようなことを市とも雑談した。落ち葉かきがヒル対策に有効か、面積はどれくらいすればよいのか、という検証を今年からでも取り組んではどうだろうか。

- 私は茶を生産している。先日６名でボランティアも交えて茶畑に入った。雨あがりで降ってはおらず、長靴で作業したが、１時間経たないうちに私に15匹のヒルがついた。6人皆についた。今日も雨がふったので作業はやめにした。このままでは畑に入る人がいなくなる。そういう実際の状況を認識して環境省と話してほしい。
- 対処療法になるが、日本からヒマラヤに行く人たちは、サルメチールを塗るらしい。それが一番効くらしい。

落ち葉かきによるヒル対策の検証について

- 【事務局】ヒルは落ち葉のあるところで越冬すると言われているので、この冬、実験的に落ち葉を集めて山を綺麗にしてみてはどうか。堆肥も高い熱をかけるなど、幾つかの手法をためして、それで本当にヒルが減るのか見てみるのはどうか。
- 10月以降、ヒルは土の中に入るので、落ち葉をかいてどうこうという問題ではないのではないか。
- 私はお茶のために山の落ち葉をかいて牛糞と発酵させて堆肥にしている。
  ＜クズ掻きした山はヒルがいないか？＞
  クズ掻きした場所では、ヒルには気づかない。
- ヒルが一番いるのが杉山で杉の枝が落ちていることろ。それから広葉樹林で落ち葉や腐葉土がありっぱなしのところ。ヒノキ林にはあまりいないやクズかきしている所には少ない。
- クズ掻きしてみて実証するのは一つの方法だろう。
- 堆肥化は、小さい枝もトラクターで攪拌するので粉々になる。正月から始めて4月くらいで小屋にしまえるくらいになる。
- 良質の落ち葉はなら、引き取り手もあるのではないか。

実践フィールドと作業実施について
・【市】クズ掻きによるヒル対策効果の検証に関しては、ある程度の面積が必要。
・今、生産森林組合が取り組んでいるのは標高の高いところばかりでそこは主に杉ヒノキ植林地。下の民有地で山の手入れをしてほしい。やって欲しい人、フィールドとして広葉樹林がどれだけあるか確認してはどうか。それが出てこないと具体的にどこで何町歩というのがでてこない。地権者がやって欲しいと言ってくれないとできない。
・地権者の合意を得るには誰かが口添えが必要。どの山の地権者が誰であるかというのは、生産森林組合で大体わかるだろう。生産森林組合などから地権者に声をかけてもらい、同意を得られたら、試験的にモデル事業事務局と話進めてもらってはどうか。
・地域で話をして希望を募る。そのためのシステムが必要。回覧を回すなどから始めることが必要。
・野外センターをよりよく活用するために、そのまわりから始めるといいのではないか。
・【市】市としては、候補地ということも含め適する場所を山に入って調査する。そしてこの山はどなたの山か、菩提地区生産森林組合の山口さんに頼むので、地権者に口添えを願う、という手順でいきたいと思う。
・高梨茶業さんの茶畑の上の林は５haくらい、野外センターの上は１haくらい（広葉樹林が）ある。工面がつけば、作業指導できる人材はいくらでもいるから進められる。
・作業指導等は言われれば応援する。
・落ち葉かきの候補地について、アイウエオサークルでは里山ふれあいセンターの近く2.4haやっている。地権者の応援、ボランティアもいるので、候補地としてスムーズにできる。ヒルも沢山いるのでよい実験場になると思う。

野外センターの活用と里山整備について
・「くずは青少年野外センター」が改築されるということなので、センターも活用しながら地域づくりにきちんと取り組まなければならないと思う。その他の地区や地元の方々と協力しながら、地元の体制を作り上げていきたい。そういうことで話合いを詰めていきたい。
・野外センターは１億８千万円で改築するとのこと。私は昨年改築計画の策定委員をしたが、大体改築の案はできている。青少年の野外教育は、最近は市外に行くこともあるようだ。折角なので市内で出来るようにしていきたい。その方向で大いに利用できると思う。
・活用方法を地元から具体的に提案する必要がある。完成の次期はおおよそ決まっている。 地権者にも相談して野外センターの周りの山を綺麗に手入れしてみる、散策路整備をするなど、実験的にでも取り組んでいけば進んでいくと思う。
・山を綺麗にすれば、訪れる人が山の中で飛び跳ねられるので、それがいい思い出になる。
・菩提地区の山（くずは青少年野外センター近隣）には遺跡などもあるので、山が綺麗になれば散策コースもできるはず。
・【事務局】野外センターの運営にその仕組みを組み込むのが一番やりやすい。様々な体験料、地場産の食事の代金など、センターのプログラム運営を機に仕組みをつくる。料金の根拠は、修学旅行コースの料金を参考に組み立てるとよい。 そういう流れが全国的にもある。作業を沢山してもらって金取るというのは難しいが、初めての人に体験してもらったり指導するのであれば、お金をもらうことができる。放棄しているだけではだめ。体験を楽しくさせて、秦野の産品を食べてもらうプログラムを作れば、正当な対価を得ることができる。
・野外センターの方だったら、椎茸のホダ木とか本格的な木炭を作って持ち帰ってもらうとか、森林組合の方から提案するのがよい。
・「くずはの泉」にはおいしい水がある。ウイスキーの水割りにも最高。

・「くずはの泉」は野外センターのそばで、県の河川の周辺。カワニナがおり蛍でる。わさび田があり、オオタカもいる。山女を放流しており、子供が手づかみしている。丁度山と里の間のところだ。蛍にはせせらぎをつくるといいようだ。そういうところの整備をするというのもアイディア。

・山が綺麗になって散策や体験活動参加者出来るようになれば、参加した人には1000円でも2000円でも払ってもらって対価が得られる仕組がほしい。対価を明確に示してもらわないと立ち消えてしまうので、キチンと示してくれるように頼みたい。

まとめ

・どのような活動や事業でも、1年2年で終るのでなく継続できるようにしてもらうことが重要。継続できる仕組みができていれば、木炭もしいたけも、菩提の生産森林組合のメンバーがボランティアも入れて実施することができるだろう。

・事業の柱を一つきめて、枝葉をつける（展開していく）のがよい。ただし継続できるような仕組みを整えることが必要。

・【事務局】ヒル対策の検証をかねて、落ち葉掻きと堆肥化を行う。これを柱にプログラムをつくり、体験の指導等は地元の皆さんにに協力してもらう。体験の指導などは皆さん（地元の方々）が指導者となる、ということで進めてよいだろうか。

・ベースは、くずは青少年野外センターやふれあいセンターを活用し、その周辺の整備を進めながら、地域の経済も含む活性化につなげていくということで、進めていきたい。